

龍樹造・中論無畏疏 (前續)

寺本 婉雅 譯註

「觀成壞品」第二十一 (Saṃbhava-vibhava parīkṣā)

此に(問)て言く、時等は唯存在なり。發生と破壞との因なるが故に。此に釋して曰。

(1)「破壞は發生なしに、若は

俱にて(破壞)有ることなし。」

//h]ig-pa ħBryun-pa Med-par Ram/

/Īhan-Cig Yod-pa-Ñid Ma-Yin/

「離成及共成 成を離るも或は

//Vinā vā saha vā nāsti

是中無有壞。」 成と俱なるも壞はあらず。」

vivhavah saṃbhavena vai/ (p. 410)

/Vergehen existiert nicht ohne oder mit Werden (Entstehen) (p. 123)

破壞は發生なしに、或は發生と俱にて亦有ることなし。何の理に由てと云ふや。釋して曰。若し破壞は發生なしに有るならば、發生に觀待(待因)せず、無因に成じ得るが故に、それは謂ふべからず。

この故に破壞は發生なしに有ることなし。若し破壞は發生と俱にて有り得るならば、斯くては又別々に成ずるが故に、無因より生すべし。別々成就すならば、俱は有りと分別を適當にせらるゝが故

に、そは又謂ふべからず。此の故に破壊は發生と俱なることも亦有ることなし。

此に問て言く。若し破壊は發生なしに、若は俱にて有ることなきも、されど今發生は有るなり。此に釋して曰。

①「發生は破壊なしに、若は

俱にて有ることなし。」

//hByun-pa h'ig-pa Med-par Ram/

/lhan-Cig Yod-pa-'Nid Ma-Yin/

「離、壞又共、壞 「壞を離るも、或は

/Vinā vā saha vā nāsti

是中亦無成 壞と俱なるも成はあらず。」

sambhavo vibhavana vai// (p. 410)

/Eutstehen ist nicht ohne oder mit Vergehen/ (p. 123)

發生は又破壊なしに、若は破壊と俱にて亦有ることなし。何の理に由て云ふや。釋して曰。若し發生は破壊なしに有り得るならば、常と不變 (Mi-ṅ Gyur-pa) となるべし。世間に於て常と不變とは毫も現はれざるが故に、そは謂ふべからず。此の故に發生は破壊なしに有ることなし。若し發生は破壊と俱にて有り得るならば、斯くては又異なる二義^(二)か一(所)に一時に發生すべし。發生と破壊とは、異なる二義^(二)が一事に一時に發生することは相違の故に、そは又謂ふべからず。此の故に發生は破壊と俱にて有ることなし。

復又

如何に法の住位に通達せる人々は言へり。若し發生は破壊と俱に有るならば、一切時に發生は破壊に墮するが故に、發生は一切時に破壊を認むべからず。若し發生は一切時に破壊するならば、それは決して住すべからず。そは又住を欲するが故に、是の如きかの理に由りて亦發生は破壊を離るも、若は俱なるも亦有ることなし。

復又

(2)「破壊は發生なしには

//h'ig-pa hByun-ba Med-par-Ni/

如何なる如くにて有り得ん。」

//Ji-Lta-Bur-Na Yod-par-hGyur//

「若離_二於成_一者

「成を離れ

//Bhavisyati kathain nāma

云何而有_二壞_一。」

如何ぞ壞は起らん。」

vibhavah sambhavain vinā/ (p. 411)

/Wie würde Vergehen ohne Entstehen existieren?/ (p. 124)

破壊は發生なしに何の理に由て能く成するを得ん。一切種(類)に於て又認むべからず。譬は如何なる如きものと云ふや。

(2)「死に生なきが如く

//h'Chi-Ba Skye-Ba Med-pa-Ltar/

破壊に發生なし。」

/h̄jig-Ba h̄Byuñ-Ba Med-par-Med//

「如_レ離生有_レ死

「生を離れて死はなき如く

//Vina eva janna maraṇaṇi

是事則不然。」

成を離れて壞あることなし」

vibhavo na-udbhavam vinā// (p. 411)

/Wie Tod (nicht) ohne Geburt, so ist Vergehen nicht ohne Entstehen/ (p. 124)

應に死は生を離れてなし。是の如く破壊も亦發生(h̄Byuñ-Ba)を離れてはなし。其處に是れを思惟するに、若し破壊は發生なしには認むべからざるが故に、發生と俱もに(破壊)ありと思惟するや。

① ② 中觀釋論——「無共離道理。」

此に釋して曰。

③ 「破壊は發生と俱にして

/h̄jig-pa h̄Byuñ Dañ Than-Cig-Tu/

如何ぞ(破壊は)有とならん。」

//ji-ltar Yod-pa-ñid-Du h̄Gyur//

「成壞共有者

「成と俱にこつ

//Sañbhavena-eva vibhavah

云何有_レ成壞。」

如何ぞ壞は起らん。」

kathain saha bhavisyati/ (p. 411)

/Wie wird Vergehen Zusammen mit Entstehen existieren?/ (p. 124)

破壊は發生と俱なるを何の理に由て能く成するや。一切の種類(類)に於て亦謂ふべからず。譬ば如何なる如きものと云ふや。

(3) 「死は生と一時に於て

//hChi-ba Skye Dan Dus-gCig-Tu/

有ること無きが如し。」

/Yod-pa-Ñid-Ni Ma-Yin-bShin/

「如_レ世間生死

「生と殆どは斯く

/na jamma-maraṇam ca evam

一時俱_レ不_レ然。」

同時にあらず。」

tulya-kālam hi vidyate// (p.411)

/Wie tod und Geburt zu einer Zeit nicht existieren/ (p. 124)

如何ぞ死は生と一時に有ることなし、是の如く破壊も亦發生と俱に有ることなし。

① 中觀釋論——法體無常遍、無處而不有。」

此に問て言く。若し破壊は發生なきか若は俱に有ることなくば、さらば今發生は破壊を離れてあり。此に釋して曰。

(4) 「發生は破壊なしには

//hByun-ba hJig-pa Med-par-Ni/

如何ぞ有ることを得ん。」

//ji-ltar Yod-pa-Ñid-du hGyur//

「若離_レ於壞者

「實に壞を離れて

//Bhaviṣyati katham nāma

云何者有_レ成。」

如何ぞ生は起りえん。」

sambhavo vibhavan viṇā/ (p.412)

/Wie wäre Entstehen ohne Vergehen?/ (p. 124)

發生は破壊なしには何の理に由て能く成するや。一切の種(類)に於て又認むべからず。何故に云ふや。

(4) 諸の存在(物_(事))に於て無常は

決して無に非ず。」

//dīnos-po Rnams-la Mi-Rtag-ñid/

Rnam-Yan Med-pa Ma-Yin-No//

「無常未嘗有

「何時も存在に於て

/anityatā hi bhāveṣu

不在諸法時。」

無常性に無きことならず」

na kadacin na vidyate// (p.412)

/Bei Dingen (bhāva) ist Nichtewigkeit niemals nicht/ (p. 125)

かの自體(bDag-ñid)有るが故に。譬は存在(物_(事))の自の自體の如し。其處に是を考ふるに、若し發生は破壊を離れては認むべからざるが故に、破壊と俱に有りと思惟するや。

① 原文 dNos-po = bhāva = 存在、事物。漢譯法。

② 般若燈論——「諸體上無常、一切時中有。」

此に釋して曰。

(5) 「發生は破壊と俱に

//ñByun-ba hñig Dan Ihan-Cig-Tu/

如何ぞ有ることを得ん。」

Ji-I-tar Yod-pa-ñid-Du hGyur//

(漢譯缺) 「實に生は壞と俱に

//Sambhavo vibhṣnena-eva

如何にも起る乎？」

kathāni saha bhaviṣyati/ (p.414)

/Wie wäre Entstehen zusammen mit Vergehen?/ (p. 125)

發生は破壞と俱にあるを何の理に由て能く成ずるや。一切種(類)に於て認むべからず。譬は如何なる如きものと云ふや。

(5)「生は死と一時に於て

//Skye-Ba ḥChi Dan Dus-g'cig-'Tu/

有ることは不合理の如し。』

①/Yod-pa-Nid-du Mi-Rig-bShin//

(漢譯缺) 「生と死とはある如くに

//na janma-maraṇam ca-eva

斯く同時なることなし。』

tulya-kalanā hi vidyate// (p. 414)

/Wie Geburt und Tod nicht als gleichzeitig wahrgenommen werden (vidyate)/ (p. 125)

如何に生は死と一時に於て有ることは不合理なる如く、發生は又破壞と俱に有ることは正しからず。

① 本偈 /Yod-pa-Nid-Ni Ma-Yin-No/ (有ることなし。)[有性は非ず。]

② 般若燈論——「成興」壞同時、云何而可得、亦加生興死、同時者不無。」

(6) 「凡そ相互に俱なるも、若は

相互に不俱なるも

//Gan-Dag Phan-Tshun Lham-Cig Gam/

/Phan-Tshun Lham-Cig Ma-Yin-par/

成ずること有ることなし

/Grub-pa Yod-pa Ma-Yin-pa/

其等は如何ぞ成ずることあらん。」

/De-Dag hGrub-par Ji-Itar Yod//

「成壞共無成

「相互に俱なるも

//Saha-anyonyena vā siddhir

離亦無有_レ成

若は相互に離れても

vina-anyonyena vā yayoh/

是二俱不_レ可

その中に成立なき彼の二に於て

na-vidyate tayoh siddhih

云何當有_レ成。」

其等の成立は如何ぞあらん。」

kathain nu khalu vidyate// (p.415)

/Wie sollten die (zwei), welche nicht weder Zusammen miteinander,

noch nicht Zusammen miteinander Erreicht werden, erreicht werden ?/ (p. 125)

何故ぞ、是の如く悉く分別するに、破壞は發生なきか、若は俱に有ることなし。發生も亦破壞なきか、若は俱に有ることなし。この故に發生と破壞とは成ずること有ることなきが故に。此の故に其等を成ずることは他の種(類)に於て如何ぞ有らん。かるが故に發生と破壞とは有ることなし。其等なくば時等は何處にか有らん。「七十空性論」(Stoñ-pa-Nid hDun-Cu-pa 龍樹著)に據れば亦、

① 「存在と無存在とは一緒になし

//dÑos Dai dÑos-Med Cig-Car-Med/

無存在なしに存在はなし

常に存在と無存在となるべし

存在なしに無存在とはならず

無存在に無存在はなし

自よりに非ず、他よりに非ず

かるが故に存在なし(以下原文)
九十一・二五)

それ無くば無存在はなし

無ければ決定して断なり

存在あれば其は二なり

此の故に存在は許されず。」

と釋せり。

① 原文 *dnos po* 存在、物、事。 漢譯法。

此に問て曰、存在は破壊の自體性 (*bDag-nid*) を具するも、又生ずや直ちに破壊せず。是の如く生ずるや直ちに住を發生し、次で破壊するが故に、此の故に破壊は發生なしに有り、發生も又破壊なしに有るべし。此に釋して曰。

/dÑos-Med Med-par dÑos-po-Med/

/Rtag-tu dÑos Dan dÑos-Med-hGyur/

/dÑos-Med dÑos-po Med-Mi-hGyur/

/dÑos-po-Med-par dÑos-Med Med/

/bDag-Las Ma-Yin gShan-Las-Min/

/De-Ira-Bas-Na dÑos-po-Med/

/De-Med-Na-Ni dÑos-Med-Med/

/Med-Na Nes-par Chad-pa-Yin/

/dÑos-po Yod-Na De-gÑis-Yin/

/De-Phyir dÑos-po Khas-Blais-Min/

(7)「盡中に發生有ることなし

不盡中に亦發生なし

//Zad-La hByun̄-ba Yod-Ma-Yin/

/Ma-Zad-pa-Ī-aḥani hByun̄-ba-Med/

盡中に又破壞もなし

//Zad-Īa hJig-pa Yañ Ma-Yin/

不盡中に亦破壞なし。」

/Ma-Zad-Ī-aḥan̄ hJig-pa-Med//

「盡則無有成

「盡の成はなし

//Kṣayasya saimbhavo nāsti

不盡亦無成

不盡の成もなし

na-akṣayasya asti saimbhavaḥ/

盡明無有壞

盡の壞はなし

Kṣayasya vibhavo nāsti

不盡亦無壞。」

不盡の壞もなし。」

vibhavo na-akṣayasya ca// (p. 415)

/Im Schwinden (kṣaya) ist nicht Entstehen, in Nichtschwinden auch ist nicht Entstehen,

Im Schwinden ist nicht Vergehen, im Nichtschwinden auch ist nicht Vergehen/ (p. 126)

凡に相續して破壞し、日々各刹那、刹那に(滅)盡し、離れること、其を盡と名く。河の流れの如く決定して住せず、自性は現かに得せず、その中に發生は分別する能はざるが故に、此の故に盡中に發生有ることなし。がの常不變にして曾て滅盡せず、離れず、それを不盡と名く、かの常相は彼れ自らに由て決定して不退轉に住す、その中に發生は分別すること認むべからざるが故に。此の故に盡中に又發生なし。かの盡中に發生なし、その中に破壞は認むべからざるが故に。此の故に盡中

に破壊有ることなし。かの不盡中に發生は認むべからず、その中に又破壊は認むべからざるが故に、此の故に不盡中に又破壊なし。是の如く若し存在に破壊の自體を具せば、盡の性(正體)を具するが故に、その中に發生有ることなし。如何ぞ生じて直ちに破壊せざれば、盡の性を具せざるが故に、その中に破壊は有ることなし。何ぞ生じて直ちに破壊せずば盡の性を具せざるが故に、その中に又破壊は有ることなし。此の故に存在(法物)は破壊の自體を具し、又生じて直ちに壊せず。是の如く生じて、直ちに住を發生し、その次に破壊するが故に。この故に破壊は發生なしに有り、發生は又破壊なしに有りととの總ての説明、それは正しからず。

① 中觀釋論——缺文、

此に問て言く。發生と破壊とは唯有るなり。存在の法あるが故なり。此に釋して曰。

(8) 「發生と破壊となくば

存在有ることなし。」

「若離於成壞

「存在を離れては

是亦無有法。」

成と壞とはなし。」

vinā bhāvāni na vidhyate / (p. 416)

/Ohne Entstehen und vergehen existiert nicht Sein (bhāva) / (p. 127)

發生と破壞となくば、存在あることなし。何故に云ふや。何處にも發生と破壞とはなし。そは常か若は無となるが故なり。そこに常は世間に於て毫もなし。無性ならば、そは存在有ることなし。

① 本偈 /d'Nos-po Yod-pa Ma-Yin-par/ (存在有ることなし) (在至有るに非ず)

② 本偈 /h'Byun-da h'ig-pa Yod-Ma-Yin/ (發生と破壞とは有ることなし)

此に釋して曰。

(8) 「存在有ることなし」 //d'Nos-po Yod-pa Ma-Yin-par/

發生と破壞とは有ることなし。 //h'Byun Dan h'ig-pa Yod-Ma-Yin//

④ 「若當離於法」 「成と壞とを離れては」 /Sambhavam vibhavam ca-eva

亦無有成壞。 存在はなご。 vinā bhāvo na vidhyate// (p. 416)

/Ohne dasz Sein (bhāva) ist, existieren aber nicht Entstehen und Vergehen/ (p. 127)

存在有ることなしに、發生と破壞とは有ることなし。何故に云ふや。存在なしに、發生と破壞とは根本(Agraya, s'hi, 所依)なきが故なり。此の故に發生と破壞とは唯有るなり。存在の法あるが故なりとの總ての説明は、そは正しからず。

① 本偈 /h'Byun Dan h'ig-pa Med-par-Ni/ (發生と破壞となし)

② 本偈 /d'Nos-po Yod-pa Ma-Yin-No/ (存在は有ることなし)

③ 中觀釋論——「又成壞二法、非空可有。」

(9) 「空の中に發生と破壞とは

認めらるゝこと非ず

不空中にも又發生と破壞とは

認めらるゝこと非ず。」

「若法性究者 成と壞とは

誰當有成壞 空に取つてはありませす

若性不空者 成と壞とは

亦無有成壞。」 不空に取つては有りませす。」

/Bei Leeren ist Entstehen und Vergehen nicht angängig.

Beim Nicht-leeren auch ist Entstehen und Vergehen nicht angängig/ (p. 127)

此に若し發生と破壞とが有とならば、其等の存在(事物)は自性空なるか、若は不空なるかに於て有るべしと計慮するとも、其處に且らく存在は有とならざる自性空に於ては、發生と破壞とは有ることなし。何故に云ふや。自性空の中に其等の發生と破壞とは認むべからざるが故なり。存在が有となれる(以下原文九十二頁)自性不空中に於て、又發生と破壞との有性(Yod-pa-Nid)はなし。何故に云ふや。自性に由て不空は決定して住し、不變の中、發生と破壞とは認むべからざるが故なり。

//Stoi-Pa hByun Dani hJig-pa Dag/

/hThad-pa-Nid-Ni Ma-Yin-No/

/Mi-Stoi-pa-Lahan hByun hJig-Dag/

/hThad-pa-Nid-Ni Ma-Yin-No//

//Sainbhavo vibhavaç ca-eva

na gūnyasya-upapadyate/ (p.417)

Sainbhavo vibhavaç ca-eva

na-açūnyasya-upapadyate// (p.418)

① 漢譯法性、梵藏に此字なし。藏語 do'ns-bo (存在、事物)に相當す。

復又

(10) 「發生と破壞とは

同一なりと認むべからず

發生と破壞とは

異性なりと又認むべからず。」

① 「成壞若一者」 「成と壞とは

是事則不然

成壞若異者

是事亦不然。」

//hByunt-Ba Dan-Ni hJig-pa-Dag/

/gCig-pa-Nid-Du Ma-hThad-Do/

/hByunt-ba Dan-Ni hJig-pa-Dag/

/gShan-Nid-Du Yan Mi-hThad-Do//

//Sambhavo vibhavaḥ ca-eva

na-eka ity upapadyate/

Sambhavo vibhavaḥ ca-eva

na nāna-ity-upapadyate// (p.418)

/Entstehen und Vergehen sind nicht als eines gängig. Entstehen und Vergehen sind auch nicht

als verschieden gängig./ (p. 128)

此に若し發生と破壞と有るならば、同一なるか、若は異性なりと計慮すとも、且らく同一なりと認むべからず。認むべからざるか故に。譬ば知と不知との如し。異性も亦認むべからず。一存在

(一)に能依するが故に。譬は總て又適當なる自體 (bDag-Ñid) の如し。

① 中觀釋論——缺偈

(11)「發生と破壞とは

見らると汝は思惟せば

發生と破壞とは

愚癡に由て見らるゝなり。」

「若謂以『現見』

「成と壞とが

而有『生滅』者

見られるに汝は思ふであらう

則是爲『癡妄』

愚痴の故に

而見有『生滅』

成と壞とは見らるゝなり。」

/Wenn du meinst, Entstehen und Vergehen Werden gesehen,

so werden Entstehen und Vergehen durch Verblendung (moha) gesehen, / (p. 128)

何ぞ愚癡の爲めに汝は是を思惟するに、諸存在(法語)の發生と破壞とは眼前に見るが故に、そこに他の認容は何を要せんと思惟せば、それに付て釋すべし。發生と破壞とは愚癡を有し、無智、轉倒

を具するものに由ては見らるなり。若し轉倒を具するが故に、其の見は勝義 (Dam-pa) を見るこ
なし。

① 中觀釋論——「體不生無體、有無體不生。」

復又

(12) ①「存在は存在より生ぜず

// dÑos-po dÑos-I-as Mi-Skye-Ste/

無存在は存在より生ぜず

/dÑos-Med dÑos-I-as Mi-Skye-ŋo/

存在は無存在(より)生ぜず

/dÑos-po dÑos-Med Mi-Skye-Ste/

無存在は無存在より生ぜず。」

/dÑos-Med dÑos-Med Mi-Skye-ŋo//

「從_二法不生_一法」 存在(物)より存在は生ぜず

//Na bhāvāṅ jāyate bhāvo

亦不生_二非法_一 無存在(無)より存在は生ぜず

bhāvo 'bhāvān na jāyate/

從_二非法不生_一 無存在より無存在は生ぜず

Na-abhāvāṅ jāyate 'bhāvo

法及於_二非法_一」 存在より無存在は生ぜず。」

abhāvo bhāvān na jāyate// (p. 419)

/Sein (bhāva) entsteht nicht aus Sein (bhāva), Nichtsein entsteht nicht aus Sein ;

Sein entsteht nicht aus Nichtsein, Nichtsein entsteht nicht aus Nichtsein/ (p. 128)

此に若し發生と破壞とは存在を依止としてありと分別せば、そこに存在より生ずるか、若は無存在は存在より生ずるか、若は無存在は無存在より生ずべしと計慮すとも、そは且らく存在は存在より生せず、存在なるが故に。譬は生(以下原文九十二左)の如し。無存在も亦存在より生せず、生の前になきか故か若は説明せられざるが故なり。譬は其より異なるが如し。存在は無存在より生せず、二の立宗を教示するが故か、若は無因より發生するに墮するが故なり。無存在も亦無存在より生せず。比量と極成との損害とに成るが故なり。何が故ぞ是の如く一切種(類)に於て存在の生は認むべからず、かの發生と破壞とは存在に依止するを認むべからず。

① 存在 物事。漢譯法。

② 般若燈論——「有體不生レ體、亦不生レ無體、無體不生レ體、亦不生レ無體。」

(13) 「存在は自より生せず

他より生ずることなし

// dÑos-po bDag-Ias Mi-Skye-Ste/

/gShan-Ias Skye-ba-Ñid Ma-Yin/

自と他とより生ずることなし

/bDag Dani gShan-Ias Skye-Ba-Ni/

有らず、如何ぞ生ずるをせん。」

/Yod-Min Ji-I-tar Skye-Bar-ñGyur//

① 「法不從自生」 「存在(物)は自より生せず

// Na svato jāyate bhāvaḥ

亦不從他生また他よりも生ぜず

paroto na-eva jāyate/

不從自他生また自他よりも生ぜず

Na svataḥ pārataḥ ca-eva

云何而有生。然らば如何にして生ぜん。」

jāyate jāyate kutaḥ// (p. 421)

/Sein (bhāva) entsteht nicht von selbst, entsteht nicht eben aus anderem.

Von selbst und andrem nicht entstehend, wie sollte es entstehen? (p. 129)

此に若し存在(法物)が生ずるならば、それは自(Svata, bDag)よりか、若は他(parata, gShan)よりか、若は二者より生すべしと計慮すとも、そこに且らく存在は自より生ずることなし。自の自體(Rai-Cri-bDag-Nid)に由て有るものに於て又生すと分別するは無意義となるが故に。無窮(可失)に墮するが故なり。存在は亦他より生ずることなし。存在は不生にして、無より異なるを認むべからざるが故なり。存在は自と他とよりも亦生することなし。如何に教示せる二者の過失に墮するが故に。是の如く存在はかの自と他との二者より生ずることなし。今かの他種より如何ぞ生ずるを得ん。かるが故に存在の生は認むべからず。存在有ることなくば、發生と破壊とは根本(依所)なきが故に、有ることは認むべからず。

① 中觀釋論——缺偈。

復又

(14)「存在ありと許さば

常と斷との見に

墮すべし、彼の存在は

常と斷とになるが故に。」

「若有所受法」^① 「存在(物)を固執するもの
取つては

即墮於斷常 常と斷との見に

當知所受法 墮すべし、その存在は

爲常爲無常」 實に常なるか、無常なるか
なるべし

/Wenn ein Sein (bhāva) als existierend angenommen wird, so würde die Ansicht (darśana) von

ewig (śāvata) und

Vernichtung (eig Abschneiden, ucheda) Zutreffen; weil dieses Sein ewig und nicht-ewig

wäre, (p. 129)

存在有りと許さば、常と見との見に墮すべし。何故に云ふや。かの存在は常と(以下原文
九十三右)不常とに
なるが故に。そこに且らく若しかの存在は常ならば、不破壞の故に、常見となるべし。不常ならば

//dNos-po Yod-par Khas-Blaus-Na/

/Rtag Dani Chad-par I-la-Bar-Ni/

/Thal-bar-ḥGyur-Te dNos De-Ni/

/Rtag Dani Mi-Rtag-ḥGyur Phyr-Ro//

/Bhāvam abhyupapannasya

Śāvata-ucheda-darśanam/

prasajyate sa bhāvo hi

nityo 'nityo 'tha vā bhavet// (p. 421)

斷見に墮するが故に、そは又謂ふべからず、かの過失は大なるが故なり。

① 中觀釋論——缺偈。

此に(問て)言へ、

(15)「存在は有りと許すとも亦

// aNos-Bo Yod-par Khas-Blans Kyari/

斷とならず、常とならず。」

/Chad-par-Mi-ñ-Gyur Rtag-Mi-ñ-Gyur/

「所有受法者

「存在を固執するものに取つては

// Bhāvam abhyupapannasya

不墮於斷常。」

中斷もなく、常住もなく。」

na-eva-ucchedo na gāgvataim/ (p. 422)

/Ein auch als existierend angenommenes Sein wäre nicht mit Vernichtung, wäre nicht ewig./

(p. 130)

何故に云ふや。是の如く。

(15)「果と因との發生は、破壞の

/hBras-Bu Rgyu-Yi ñByun hJig-Gi/

相續はかの「有」^①なるが故に。

/Rgyun De-Srid-pa YinPhyir-Ro//

「因果相續故

「かの有の體は

// Ūdaya-vyaya-samīānah

不斷亦不常。」

果と因との生滅相續なるが故に。」

phala-hetvor bhavañ sa hi// (p. 422)

/Weil der Verlauf (santāna, Zusammenhang) von Entstehen und Vergehen von Folge und Grund das Dasein (bhava) ist./ (p. 139)

そこに因は滅しつゝあるものより果は生ずるが故に、断とはならず。果は生せば、因は滅するが故に、常とはならず。

① 原文 Srid-pa (有) は十二縁起中の「有」(bhava) と同字なり。

② 中觀釋論——「若生滅相續、故因果有體。」

此に釋して曰。

(16) 「若し因果の發生、破壞の

相續はかの「有」にてあらば

破壞中に亦生なきが故に

因は斷に墮すべし。」

「若因果生滅

相續而不斷

滅更不生故

「若しかの有體が

果と因との生滅相續ならば

滅の再生なきが故に

//Gal-te hBras-Bu-Rgyu hByunhJig-Gi/

/Rgyun De-Srid-pa-YinGyur-Ne/

/hJig-la Yai Skye-Med-pahi Phyur/

/Rgyu-Ni Ched-par Thal-bar-hGyur//

//Udaya-vyaya-santānaḥ

phala-hetvor bhavaḥ sa cet/ (p. 422)

vyayasya-apunar-utpatter

因即爲斷滅。」 かの因の斷に墮すべし。」

hetu-ucchedah prasajyate./ (p. 423)

/Wenn der Verlauf des Entstehens und Vergehens von Folge und Grund das Dasein (bhava) wäre,

So würde, weil beim Vergehen nicht nochmals Entstehen wäre, der Grund abgeschnitten werden/ (p. 130)

若し果と因とは、發生と破壊との總ての相續が有るならば、斯くては破壊中に又生なきが故に、相續は斷に墮すべし。譬は種子の燃ゆるが如し。

復又

(17)「存在は自性あらば

// dĪnos-po Ņo-Bo-Ņid Yod-Na/

存在は無となるは不正なり。」

/dĪnos-Med ħgyur-bar Mi-Rigs-So//

「法住於自性」

「自性に由りて實在するもの」
取ては

/Sadbhāvasya svabhāvena

不應有有無。」

非實在は不合理なり。」

na-asadbhāvaḥ ca yujyate/ (p. 423)

/Wienn Sein (bhāva) wesentlich (svabhāvena) existiert, so ist es nicht möglich, dass es Nichtsein wird./ (p. 130)

瓶の存在は瓶の自性 (No-Bo-Nid) に由て有るならば、存在は無となるべしとは不合理なり。何故に云ふや。自性は他に變せざるが故に。かるが故に、存在の見あらば、因も亦滅すべしとは認むべからず。果も亦生すべしとは認むべからず。かの生と滅とは轉變 (r-Gyur ba) あるが故なり。斯くて又そこに常見に墮するが故に、とは謂ふべからず。

復又

(17) 涅槃の時に施あり

// Mya-Nan-tDas-paḥi Dus-Na/

「有」の相續は寂滅するが故に」

/Srid-Rgyu Rab-tu-Shi-Phyir-Ro//

涅槃滅相續

「而して涅槃の時に於て

/Nirvāna-kāle ca-ucchedat

則墮於斷滅。

有(體)の相續の寂滅するが故に」

praṅamād bhava-saṁtateḥ // (p. 424)

/Zur Zeit des nirvāna wäre Vernichtung (uccheda), weil der Verlauf des Daseins (bhava-santati)

völlig beruhigt würde. / (p. 130)

若し「有」(Srid-pa, bhava)の相續あるを欲せば、斯くては涅槃の時に於て斷見に墮すべし。何故に云ふや。涅槃の時に於て阿羅漢の「有」(Srid-pa) (以下原文九十三左)の相續を能く寂滅するが故なり。かるが故に「有」の相續ありと分別せば、常と見との見に墮すべし。

① 中觀釋論——「死有若未滅、取初有不_レ然。」

② 原文 Srid-pa (bhava) は十二緣起中の「有」と同語なり。

此に(問て)言く。涅槃の時に於て斷となるならば、成ることも亦容易にして、「有」(Srid-pa)の相續は「再生」(mTshams-Sbyor-ba, 結生)あるが故に、斷見に墮せざるべし。此に釋して曰。

⑬ 「最後(の有)の滅したるとき

//Tha-Ma ĩGags-bar Gyrur-pa-Ni/

最初の「有」は結ばざるべし

/Srid-pa Dah-po Sbyor Mi-ĩGyur/

最後「の有」の滅せざるべし

/Tha-Ma ĩGags-pa Ma-Gyur-pa/

最初の「有」を結合せず。」

/Srid-pa Dah-por Shyor Mi-ĩGyur//

「若初有滅者

「最後の(有)の滅したるときに

//Carame na niruddhe ca

則無有後有

最初の有は結ばず

prathamō yujyate bhavah/

初有若不滅

又最後の(有)が未だ滅せざるとき

Carame na-aniruddhe ca

亦有有後有。」

最初の有は結ばず。」

prathamō yujyate bhavah// (p. 425)

/Wenn das letzte (sc. Dasein) vergangen ist, wird das erste Dasein nicht angeknüpft;

Wenn das letzte nicht vergangen ist, wird das erste Dasein nicht Angeknüpft. / (p. 131)

此に最後の「有」(有)とは死の部に屬する最後心(臨終の念)なるが故に、最初の「有」とは生の部に屬す

る最初の心(の念)なり。そこに若し「有」の相續は再生(生結)あらば、最後の「有」の滅するか、若は不滅の最初の「有」に再生すべしと計慮すとも、そこに更に最後の「有」は滅すれば、最初の「有」に再生せざるべし。何故に云ふや。滅あるが故に、若は最後の「有」あるが故に。譬は阿羅漢の最後の「有」は滅したるが如し。最後の「有」は滅せず、亦最初の「有」に再生せざるべし。何故に云ふや。不滅なるが故に。譬は現在の「有」の如し。

此に問て言く。滅と不滅との最後の「有」は、最初の「有」に再生(生結)なきも、最後の「有」は滅する如く、最初の「有」に再生すべし。此に釋して曰。

(19)「若し最後の「有」が滅しつゝあるとき

//Gal-Te Tha-Ma ħGags-bShin-pa/

最初「の有」が生するならば

/Dani-por Skye-Bar ħGyur-Na-Ni/

滅しつゝあるものは一となり

/ħGag-bShin-pa-Ni gCig-ħGyur-Shii/

生じつゝあるものは又他(の有と)なるべし。」

/Skye-bShin-pa Yai gSani-du-ħGyur//

「若初有滅時

「若し最初の有が滅しつゝあるときに

//Nirudhyamāne carame

而後有生者

最初の有が生するならば

prathamō yadi jāyate/

滅時是一者

滅しつゝあるものは一(有)があるべし

nirōdhyamāna ekaḥ syāi

生時是一有。生じつあるものは他の有があること。

jāyamāno 'paro bhavet// (p. 426)

/Wenn das vergehende letzte (sc. Dasein) als erstes entsteht,

So wäre das Vergehende eines, das entstehende ferner ein anderes./ (p. 131)

若し滅しつゝある最後の「有」は、最初の「有」に再生するならば、斯くては「有」に墮すべし。何故に云ふや。滅しあるものは一となり(以下原文 九十四右)。生じつゝあるものは他のものとなるゝが故に。異因の「有」の如きが故に、そは謂ふべからず。

① 中觀釋論——「是即同所依、此滅彼蘊生。」

此に問て言く。此に生じつゝ、生じつゝありと名けらる此の二は一時に於て有ることなけれども、是の如く最後の有の滅するとき、最初の「有」は生ずなり。此に釋して曰。

(三) 若し滅しつゝあるものと、生じつゝあるものツマ //Gal-te ħGags-ĪShin Skye-ĪShin-Dag/

俱に結生することあらざるも ^① /Ihan-Cig Sbyor-Bahañ Yod Min-Na/

かの(五)蘊に於て死し /Phun-po Gani-la ħCh-i-ħGyur-ba/

そこに又生は發生すべし。^② /Der-Ni Skye-Bahañ ħByuñ-bar-ħGyur//

「若言於生滅」^③ 「若し滅しつゝあるものと生じつゝあるものが

//Na cen nirudhyamānaç ca

而謂一時者

俱(時)に結ばらるるは

jāyamāṇaḥ ca yujyate/

則於此陰死

俱(時)に死する其等に於て

sārdhān ca mriyate yeṣu

即於此陰生。」

其等は其に於て生ずべし。」

teṣu śandheṣu jāyate// (p. 426)

/Wenn Vergehendes und Entstehendes nicht zusammen verknüpft werden, (p. 131)

so ist Entstehen in den Gruppen (skandha), in welchen Sterben ist./ (p. 131)

若し滅しつゝあるものと、生じつゝあるものと名けらるゝ此の二は一時に有ることなけれども、是の如く最後の「有」が滅しつゝあるとき、最初の「有」は生ぜざらば、斯くては總ての(五)蘊に死する其等に於て生は亦發生に墮すべし。何故に云ふや。滅しつゝある其等の蘊に於て生しつゝあるものは存すと謂ふが故に。斯くては死と生との不等の二は一蘊に於て一時に發生するが故に。そは謂ふべからず。この故に此に滅じつゝあるものと生じつゝあるものと名けらる此の二は一時に有ることなけれども、是の如く最後の「有」は滅しつゝあるときに、最初の「有」は生ずと云へるかの總ての説は正しからず。

① 本偈 /Lhan-Cig-tu Yan Rigs-Min-Na/ (俱に又不合理なれば)

② 本偈 /De-La Skye-Bahan hByun-gGyur Ram/ (ネンに生は亦發生すべし)

③ 中觀釋論——「如是此三時、有相續不然、若無彼三時、云何有相續。」

20) [是の如く又三時に於て

「有」の相缺は不合理なり

三時中に總てなし

そは如何ぞ「有」の相續あらん。

① 「三世中求有」 「是の如く三時に於ても

相續不可得 有の相續はなし

若三世中無 三時に於てなきと、其のもの

何有有相續。』 如何ぞ有の相續あらん

/So ist auch in den drei Zeiten der Daseinszusammenhang nicht möglich (yukta).

Was in den drei Zeiten nicht existiert, wei ist das Daseinszusammenhang? (p. 132)

是の如く能く分別するに、三時(三世)に於て亦「有」の相續は不合理ならば、三時に於て一切種

(類)に觀察するに、三世に無なるものに、そは如何ぞ有の相續あらん、種子の燃ゆるが如し。

① 中觀釋論——「有相續若無、云何有成壞、若無彼成壞、法如何可成。」

阿闍梨耶聖龍樹に由て造られたる「根本中道無畏疏」内、「發生と破壊との觀察」と名げられて、「第

